

就労経験を「流用」する
—技能実習生・インターンシップ生を中心に—
“Appropriation” of labour experience: with a focus
on technical intern trainees

佐々木祐 (神戸大学)
SASAKI Tasuku (Kobe University)
tskssk@lit.kobe-u.ac.jp

昨今のコロナ禍による入国制限により、日本社会における労働力不足を補填するために外国人労働者が不可欠であること、またそうした人々の労働条件や生活条件を改善することの必要性が、こんにちますます明白になりつつある。一方で、明確な外国人労働者・移民政策の不在により、労働現場における非人道的な扱いやさまざまな違法・脱法行為が横行していることも広く知られるようになった。厳しい生活に耐えかねて逃亡・失踪する技能実習生の増加や、そうした実情を告発し変革を求める社会的な動きもあり、政府も外国人技能実習制度の廃止まで見据えたあり方の検討を余儀なくされている。ただし、こうした人々をただ単に受動的な被害者として措定するのではなく、劣悪な条件や不利な法的立場をいったん引き受けながらも、それぞれの希望や戦略を資源として現状を生き抜く「人間」として描き出すルポルタージュも近年発表されるようになってきている（安田 2021 など）。

本報告では、主として2019年度に実施した、豊岡市内の事業所にて就労する技能実習生・インターンシップ生への調査データをもとに、彼/彼女らが自らの生活・労働をどのように評価し、またそれぞれの将来をどのように構想しようとしているのかを分析する。また、支援団体や地域の人々の声なども援用し、地域社会に生きる貴重な若い人材でもある実習生たちをめぐるそれぞれの期待やその齟齬などについても考察する。制度的な側面に注目した研究が多いなか（眞住、2017 など）、地域の特性に着目しつつ、そこでの外国人労働者の具体的な生や希望の様態を描き出すことを目的とする。

外国人非集住地域である豊岡市において、原則として数年間の短期在留資格によって就労する技能実習生およびインターンシップ生はおよそ300人であり、市内在住外国人人口のおよそ4割を占める（2021年11月末時点）。従事する業種の特徴としては、農業・製造業だけでなく、漁業や観光・宿泊業も目立つことが、漁港と温泉を擁する当地域の特徴を表してもいる。その過半数はベトナム出身者であり、ついで中国、インドネシア、フィリピンと続く。

ほとんどの技能実習生・インターンシップ生は、来日してから直接、人口約8万人、そして貴重な観光資源でもある漁村や農山村を抱える豊岡市に移動する。まずはその時点で、その多くは期待の「ズレ」や「失望」を覚えたという。ドラマやアニメ・音楽などを

通じて抱いていた、近代的で都会的な「ニッポン」とはかけ離れた地方都市において、さらに「離れ小島」上に点在する寮と職場を往復する生活が始まるわけである。さらに、聞き取り対象者の多くは娯楽や同世代の若者との出会いの少なさについて語る。

もちろん、こうした「期待はずれ」をいつまでも嘆いているわけではない。調査対象者のほとんどは、結果としてこうした生活に満足していると回答している（愚痴を言ったところでどうしようもない、という面もあるが）。携帯電話やSNSを利用して母国の家族・友人とコミュニケーションをとることが可能であることに加え、支援団体による日本語教室や各種イベント、また現時点ではまだ限定的ではあるが地域行事への参加などを通じ、同様の状況にある外国人労働者や日本社会との交流を模索しながら、日常生活における楽しみや癒しの機会を創出している。

もちろん「我が国が先進国としての役割を果たしつつ国際社会との調和ある発展を図っていくため、技能、技術又は知識の開発途上国等への移転を図り、開発途上国等の経済発展を担う「人づくり」に協力する」という外国人技能実習制度の「目的」が、空疎な文言でしかないことを実習生自身は（そして事業主も）よく知っている。だが、日本における労働の日々を、ただ単に「金儲け」だけのためと割り切って過ごしているわけではない。彼/彼女らは自らが経験しつつある現状を、「タテマエ」や「カネ」とはどこか別のところで活用しようとしている。

このように、当初の期待や「本来の目的」とはズレた日本での就労経験を、こうした若い外国人労働者たちがいかに「資源」として位置づけ、それを将来へ向けた「資本」として蓄積しようとしているのか。こうした「流用」の過程に注目することにより、現状ではどうも理想的とはいえない日本における外国人労働者の実践をいくぶん違った視角からまなざすことができるはずだ。

<主な参考文献>

眞住優助 2017 「外国人技能実習制度の利用の地域差とその要因の分析-水産加工業の事例-」 『ソシオロジ』 68(4)

安田峰俊 2021 『「低度」外国人人材-移民焼き畑国家、日本』 角川書店